
西洋人による東アジア報道論序説

—フランス人東京特派員の取材記録から見る日本—

脇 田 泰 子

はじめに

中国、日本をはじめとする東洋（いわゆる漢字文化圏）に関する西洋人の手から成る手記や書籍は数多く存している。早くはヴェネツィア共和国（現・イタリア）の商人、マルコ・ポーロ（Marco Polo 1254-1324）が1271年から1295年にかけて旅したアジア諸国で見聞した内容の口述を再録編集した『東方見聞録』（La Description du Monde, Il Milione）が中世ヨーロッパ人のアジア観に大きな変化を与えたとされる。また、マリーン朝時代のモロッコ生まれのベルベル人、イブン・バットゥータ（英語名 Ibn Battuta 1304-1368）も30年間、イスラム世界から非イスラムのアジア（ベンガル、スマトラから泉州・広東と杭州を経て大都まで）広範囲に旅したとされ、彼がまとめた『諸都市の新奇さと旅の驚異に関する観察者たちへの贈り物』（通称 Rihla・大旅行記）も世界を知るうえで資料的価値があるとされる。いずれも、モンゴル帝国時代にユーラシアの東西を結ぶ交流が盛んになったことが背景にある。

しかし、ヨーロッパ諸国が東アジアに影響を行使し始めたのは主に16世紀以降である。大航海時代を経て胡椒貿易などを東アジアとの間に求めて、まずは当時の中国・明との関係を深めると同時に、キリスト教の布教を目指したからである。マテオ・リッチ（Matteo Ricci 中国名・利瑪竇 1552-1610）は苦勞のすえ、フランシスコ・ザビ

エル（Francisco de Xavier 1506-1552）が成し得なかった中国の宣教に成功し、明朝宮廷でも活躍した。中国に欧州の最新技術を伝え、逆に欧州に向けては中国文化を紹介して、東西文化の架け橋となった。彼が刊行した世界地図『坤輿万国全図』（1602年）では「亜細亜」「日本海」「赤道」など、ヨーロッパの世界観が中国語に翻訳され、リッチは東洋研究、とりわけ中国学（英 sinology）の先駆者とも見做される。このほか、ドイツ人の医師・博物学者で長崎郊外に鳴滝塾を開いたシーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796-1866）の『日本』（Nippon）や、イギリス人・アーネスト・サトウによる『一外交官の見た明治維新』（A Diplomat in Japan）など、日本の文化・文明を幅広く研究する学問分野も含め、宗教家、貿易商兼冒険家、学者、文化人・外交官など様々な西洋人がその後も東洋の紹介を成していく。

一方、ニュース報道の世界で西洋のジャーナリストが東洋について伝えるようになるためには、欧米に新聞産業が本格的に興り、専門記者が登場する19世紀後半以降を待たねばならない。さらにこの時期にはむしろ通信社にこそ、取材ニュースを迅速に提供する役割が求められていた。フランス系アヴァス（Havas）、ドイツ系ヴォルフ（Wolffs）、イギリス系ロイター（Reuter）の三大通信社は1870年、世界のニュースの収集・販売の独占権を分け合う国際協定で合意し、中国、日本の極東はロイターのカバー範囲となった。その後は各国の新聞社も独自に記者を特派する体制が始まった。日露戦争（1904-1905）では、負けた

はずのロシアの全権代表ウィッテ (Sergei Yul'jevich Witte 1849-1915) が巧みなリークにより各国記者にロシア優位な情勢に結びつく情報を取立て流した結果、戦争に勝った日本の方が、講和交渉の場では大幅な譲歩を強いられることとなった。この事例は、メディア戦略が国際政治の流れをも左右する力を持ち得ることを示した最初の大きな事例として知られている¹⁾。

このように、東アジアがジャーナリズムの世界でどのように伝えられ、その結果がいかなる問題を招来するに至るかという報道の歴史を構築するに当たり、まず、振り出しとしてフランス人ジャーナリスト、マルセル・ジュグラリス (Marcel Giuglaris 1922-2010、以下マルセル) に焦点を当てることから始めたい。本論は、その意味から東アジア報道論序説と位置付けられるものである。

マルセルは1952年の初来日以来30年間、フランス・ソワール (France Soir) 紙等、仏主要紙の東京および極東特派員として日本を拠点に活躍したフランス人ジャーナリストである。彼はまた、仏映画産業の発展と作品の普及を目的としたユニフランス・フィルム (UniFrance Films) の駐日代表として、戦後日本に多くのフランス映画を紹介した。このようなキャリアを通じて、マルセルは太平洋戦争の廃墟から日本が国際社会に復帰し、奇跡的復興を遂げていく過程について、政治・経済・社会はもちろん、映画も含めた文化面に至るまで、非常に多角的な日本報道を祖国向けに発信し続け、1983年に帰国した。17年後、88歳で亡くなると、東京を拠点に国際ジャーナリズム活動に明け暮れていた当時の資料群が、そっくりそのまま遺されることとなった。遺族と友人らは、その膨大な取材資料をフランス国内における日本と東アジア、それぞれの研究拠点に寄贈することにした。

この話を、マルセルの関係者から初めて伝え聞いたのは2013年夏のことである。これらの資料の整理と活用を行うことが可能ならば、一人のフ

ランス人ジャーナリストが戦後の日本とアジア諸国の激動と変容について、どのような点に着目し、祖国に向けて実際に報じていったのかを検証することができるのではないかと。また、これらの資料から第二次世界大戦後、フランス人の新たな日本観が国際ジャーナリズムの影響も受けながら、どのように形成されていったのかが解明され、さらには、そこから戦後の日仏交流がどのように広がっていったかを明らかにすることにもつながると考え、報道の実態に焦点を当て、国際ニュース報道史の構築を思い立つに至った。研究を進めるに当たっては、これらの資料群の存在と内容を現地で確認する調査を行うことが最優先である。この調査を目的とした渡仏の準備を始めたのは、話を初めて聞いてから1年経った2014年 (平成26年) 夏であった。

1) 日仏関係と日本を報じるフランス人ジャーナリストの系譜

調査内容に言及する前に、日仏両国の交流の歴史について先に述べておく。二国間の外交関係は1858年、日仏修好通商条約が江戸で調印されたことにより始まる。1862年、幕府は竹内保徳 (1807-1867) を長とする第1回遣欧使節 (文久遣欧使節) をフランスにも派遣したが、これは1615年に仙台藩の伊達政宗がローマに派遣した慶長遣欧使節の支倉常長が日本人として南部サントロペにフランス初上陸して以来、ほぼ250年ぶりのことであった。以降、明治期の日本は軍事、経済、法律、芸術分野を中心に様々な知識をフランスから摂取、導入し、1924年には日本経済近代化の祖、渋沢栄一 (1840-1931) と、著名な詩人でもあった当時の駐日フランス大使のポール・クロードル (Paul-Louis-Charles Claudel 1868-1955) の両人が中心になって、東京に日仏会館が創立された。

一方、日本報道に関わるフランス人ジャーナリストとしては、アジア報道の第一人者として著名

なロベール・ギラン (Robert Guillain 1908-1998) が、第二次世界大戦直前の1938年、アヴァス (Havas) 通信社 (その後のAFP通信社) 記者として日中戦争下の日本に着任していた。ドイツに占領された祖国に親独のヴィシー政権が誕生したことから、戦時中も「友好国特派員」として日本に残って活動を続けたのである。1944年6月の連合国軍によるノルマンディー上陸、そして8月25日のパリ解放を経て独軍が降伏し、ヴィシー政権が崩壊すると、逆に彼は長野県軽井沢市で軟禁状態に置かれることになったが、終戦直後に解放され、その後はフランス高級紙ル・モンド (Le Monde) の特派員となった。『渦巻く東南アジア—現地報告』(改造社、1949) 以来、日本語訳された著作も多く、『アジア特電 1937-1985 ~ 過激なる極東』(平凡社、1988) は彼のキャリアの集大成となる作品である。同じル・モンド特派員の後輩として1985年の来日以来、日本に在住するフィリップ・ポンス (Philippe Pons 1942-) は『裏社会の日本史』(筑摩書房、2006) を著し、現在もル・モンドに随時、記事を執筆中である。

2) 日仏文化交流史研究におけるマルセルの立ち位置

マルセルの日本報道のテーマは多岐にわたるが、中でもとりわけ文化については浅からぬ関心を寄せ、日仏文化交流に寄与した功績も非常に大きい。この分野に関する先行研究としては、日仏会館を拠点に、近年では明治期にフランスに渡った先人の異国体験を通して日本の近代化のプロセスを改めて辿る連続講演集『近代日本と仏蘭西—10人のフランス体験』(三浦信孝編、大修館書店、2004) および日仏修好通商条約締結150周年を記念し、美の国が交わり育んだ芸術の豊かさを検証する『王冠の軌跡—日仏芸術交流の150年』(三浦篤編、三元社、2013) といった著作や、日仏会館創立90周年記念シンポジウム「両大戦間における日仏関係の新段階」の開催などが代表例とし

て挙げられる。これらの日仏交流は、明治維新後の近代日本が、欧米の列強を手本に新たな知見を獲得する段階に焦点を絞ったものが少なくない。その意味では、日仏両国社会が大打撃を受けた第二次世界大戦直後の混乱期やその後の復興期をテーマにした研究は、先述のユニフランスを通じたマルセルの業績に光を当てた古賀太著『マルセル・ジュグラリス—戦後フランスにおける日本映画研究のパイオニア—』(2013) など、限られた形で言及がなされている程度で殆ど着目されていないのが研究の現状である。

そもそもマルセルが日本に興味を持ち、国際ジャーナリストとして日本取材を行うようになった経緯を、最初の妻で舞踊家だった故・エレヌ (Hélène Giuglaris 1916-1951) の存在を抜きに語ることはできない。彼女は第二次世界大戦以前から、日本滞在経験のある外交官などの知人を介してSPレコードを入手して謡曲を聞き、それに写真を重ね合わせることで、未だ見ぬ日本の能を脳裏に思い描いた。とりわけ、彼女を魅了したのは羽衣伝説で、大戦中も数少ない協力者を頼りに資料収集と研究に努めた結果、能をイメージした創作舞踊「HAGOROMO」を完成させるに至った。終戦から3年経った1949年、パリ・ギメ東洋美術館で行われた初演にはクロード・デルも足を運び、新聞各紙も彼女の舞踊を絶賛した。彼女の最も近くにあって活動を支え続けたマルセルも、この機縁により、遠い日本の文化に大きな関心を抱くようになったのである。初演から2年後の1951年、エレヌは白血病のため35歳の生涯を閉じる。ついに行けなかった自分の代わりに羽衣の舞台をぜひとも見てきてほしい。この遺言により、マルセルは亡き妻の遺髪を携え、三保の松原を訪れた。この“センチメンタル・ジャーニー”がその後の彼の人生を大きく変えることになる。

戦勝国の女性、エレヌの日本への思いは、敗戦に打ちひしがれていた三保の人々に大きな感銘を与えた。「羽衣の碑」(写真②) が建立され、そ

こに彼女の遺髪が収められることに決まった。翌1952年11月に執り行われた碑の除幕式では、能「羽衣」が奉納された。以来、富士山の世界文化遺産登録で注目を集める今日まで、三保では毎秋、エレヌの功績を顕彰する「羽衣まつり」が行われ、日仏文化交流の歴史に大きな足跡を刻んでいる。



写真② エレーヌの碑

この部門に関する先行研究としては、エレヌの創作舞踊HAGOROMOと日仏関係に及ぼした影響について論じたものとして、飯塚恵理人「梅若万三郎家所蔵16ミリ映画フィルムのデジタル化について (1)、(2) —エレヌ夫人羽衣の碑除幕式—」「同 (3) —エレヌ夫人とマルセルが遺したもの—」(梅若研能会「橘香」第56巻6号P.14-15、第56巻7号P.16-17、第56巻9号P.18-19、2011)、および、脇田泰子「エレヌとマルセルの愛した日本と彼らの祖国フランスとの文化交流に見る能」(梅若研能会「橘香」梅若研能会第56巻8号P.16-17、2011)がある。さらに、2013年には東京・日仏会館に於いて、「能・羽衣を前大戦直後のパリで紹介したフランス人夫妻と日仏交流—元東京特派員マルセル・ジュグラリスと妻エレヌを語る」のシンポジウムが開かれ(主催・日仏メディア交流協会)、筆者もパネリストの一人として参加するとともに、同年夏にパリ・ボン

ピドゥー・センター・公共情報図書館(BPI=Bibliothèque publique d'information)で行ったエレヌ創作舞踊の1949年初演に関する仏各紙批評記事の比較調査に係る発表を行っている。

3) マルセルのジャーナリズム活動と文化への関心を示す資料

1922年に南仏ニースで生まれたマルセルは、青年士官養成校として名高いサンシール陸軍士官学校に入学した。すぐに第二次世界大戦が始まり、レジスタンスの闘士に転じたが、ドイツ軍に捕らえられ、終戦で解放され、ジャーナリストの道を選ぶようになる。前述のように終戦後、エレヌと出会う中で彼は日本文化に触れ、妻の死後、フランスから三保へと向かったのだが、その際、彼の来日に手を差し伸べたのが、静岡県浜松市出身で戦前から長らくフランスに暮らし、当時は読売新聞論説委員だった松尾邦之助である。世界は新たに米ソ対立による東西冷戦時代に突入し、朝鮮戦争が勃発した戦後の東アジアも、依然として激動の渦中にあった。マルセルの来日は、この東アジア情勢を取材する経済誌特派員としての任務も帯びていた。松尾の手引きや影響もあり、マルセルは三保の人たちに歓迎され、エレヌの碑の除幕とともに彼女の遺髪を取めると、吹っ切れたかのように特派員としての道を邁進し始める。吉田茂から中曽根康弘に至る代々の首相や主要な政治家、作家の三島由紀夫、石原慎太郎、そして日本映画界の巨匠、黒澤明をはじめとする文化人など多くの知己を得て、日本を政治、経済、文化も含めた社会全般のあらゆる側面から複合的、かつ活発な取材を行い、その実態に迫った。

朝鮮戦争からベトナム戦争、そして中国の文化大革命へと続く激変の数々について彼は東アジア全域で現地取材を行い、歴史の証人として記事を執筆し、この地域の戦後の姿を祖国・フランスに向けて伝え続けた。その多面的な活動の中でも、日本についての紹介は出色のものとして評することが

できる。このような未だ十分に知られるには至っていない国際記者としてのマルセルの業績に光を当てることにより、西洋人による東アジア報道論と海外ジャーナリズムの本質を明らかにしようと試みることができると思う。

日本映画がカンヌ国際映画祭に参加できるようにするための橋渡し役となったのも彼である²⁾。戦後ジャーナリズムの草創期から日仏両国の間でこのような文化に関する報道と交流が行われていた事実は、国際報道の歴史を考えるうえでも非常に興味深い。マルセルは、この長年にわたる日仏交流に貢献した業績により、2004年、旭日中綬章を受章した。

2014年秋、ドイツとの国境に近い仏東部、アルザス地方圏南部のオー・ラン（Haut-Rhin ライン川上流）県に「アルザス欧州日本学研究所」（Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace、以下CEEJA）を訪ねた。マルセルの死後、日本に関する彼の全取材資料がここに寄贈されたと聞いていたからである。アルザスの中心都市、ストラスブール（Strasbourg）から南下し、コルマル（Colmar）の手前を西に入ったヴォージュ山脈の裾野にブドウ畑が広がる中、キエンツハイム（Kientzheim）という小さな村にCEEJAはある。良質の白ワイン産地としても名高いこの一帯は、



写真③



写真④ アルザス・ワイン街道の看板

「ワイン街道」と呼ばれている。（写真③、④）

CEEJAの建物は1980年代、日本の私立の中・高等学校がアルザスに分校を出した際、校舎と寄宿舎として用いられていたものである（写真⑤はCEEJAの敷地内に建つ旧校舎）。このことから察せられるように、アルザスと日本は良好な関係を保ってきた。それどころか、この地域には、日本との間にヨーロッパで最も古い直接交流の歴史が認められ、その始まりは幕末にまで遡ることができる。当時、この地方では繊維産業が盛んだったが、中でも特に活況を呈していたミュルーズ（Mulhouse）に、大阪の商人が1863年、日本の和柄図案を持ち込み、冬用着物の羊毛生地への染色と製造を依頼した。これが後に「本モスリン（mousseline）」、或いはメリンスと呼ばれるようになる生地のことで、その時の発注記録は今も現地に残されている³⁾。しかもこの時に発注された和柄が生んだのは、経済交流に留まらなかった。欧州にこのような経緯で初めて持ち込まれた日本様式はその後、印象派やアール・ヌーボー、ジャポニスムなど、芸術の分野にも計り知れない影響をもたらすことになったからである。それから1世紀、1986年のソニー・フランスの工場建設以来、

この地に進出する日本企業は20社を超え、その投資額もフランスの他のどの地域よりも多い。1991年にはストラスブール大学に日本語学科が新設され、若い世代の日本への関心も高まっている。CEEJAの創設はその10年後、2001年のことであった。



写真⑤

果たして、マルセルの膨大な日本資料群はCEEJAの付属図書館に確かに収められていた。ただし、その大部分が未整理の状態段ボール箱に詰められたまま、保管されているというよりは、雑然と置かれているに等しいものであった。そして、その保管場所とは、前述の私立学校が生徒の寄宿舎の大浴場として用いていた元・風呂場のスペースなのであった（写真⑥）。この現状を目の当たりにし、調査研究の必要性を痛感したのである。



写真⑥

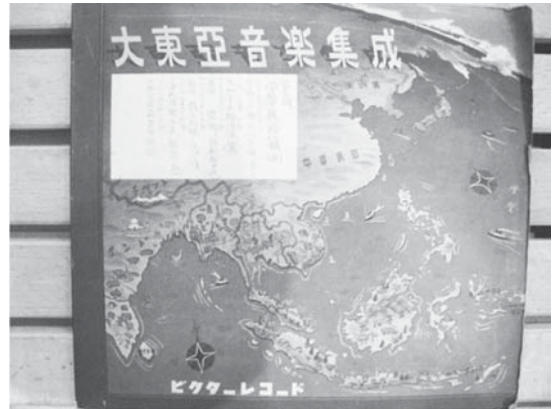
マルセルの日本取材関連資料は、ほぼ手つかずのこのような状態で残されている。原田香織『現代芸術としての能』の中に、CEEJAにあるエレヌと能の資料について言及がなされた部分があるが⁴⁾、この時の現地調査の結果、整理されているとかわらうじて言い得るのは、全体の中でも、能楽に関するごく一部に過ぎないことが確認された。彼女の創作舞踊HAGOROMOに関するものを含め、整理作業がほぼ完了しているのは、ストラスブール大学大学院日本語学科で能楽の研究に携わる地元のフランス人大学院生が、この関連資料の分類をCEEJA図書館からアルバイトとして依頼され、担当したからである。（写真⑦）



写真⑦ エレヌと能楽関連資料

しかし、それ以外のまったく未整理の段ボール32箱分の資料については、内容によって資料名と番号を付し、目録を作成したり、重要な価値があると認められるものについては撮影を行ったうえで、データとして保存したりする取り組みも必要となる。今回の訪問滞在では、細かい内容にまで立ち入る時間はまったくなかった。日仏の共同作業が実現するならば、マルセルが日本とその文化のどのような点に着目し、それをどのように報じていたのかを解き明かすとともに、それらにより、仏メディアによる日本文化観の形成過程を明らかにすることが可能となる。これが日仏文化交流史、さらには両国文化面の歩みと国際ジャーナリスト、マルセルの位置付けの解明に直結すると考えられる。マルセルの日本観の形成とジャーナリストとしての役割がどのように連関しているかという問題を明らかにすることが可能になってくる。

妻エレーヌの能と羽衣の関連以外には、具体的にどのような資料が残されているのか。昭和20～50年代にかけて日本で行った取材に基づく日本とその文化に関する記述をとどめる30冊以上に及ぶ手書きの取材ノート、写真やアルバム、撮影ネガフィルム、新聞記事のスクラップ、インタビューの録音カセットテープ等の音声メディアや、執筆の参考を集めたと思われる様々なパンフレットや絵葉書などが段ボール箱に無造作に入れている。戦前から戦後にかけてのSPレコード類や手紙、メモもある。(書籍については既に図書館の書架に収められている。)以上、多種にわたる資料群の整理と分析作業を通じて、日仏文化交流史の観点からなる国際ジャーナリスト、マルセルの役割を考究することが可能と考えられる。



写真⑧ ビクターレコード『大東亜音楽集成』(1942)



写真⑨ 几帳面な手書きの取材ノートの数々

一方、マルセルの中国関連の資料は、パリ第1大学パンテオン・ソルボンヌ付属の「現代アジア史センター」(以下CHAC = Centre d'Histoire de l'Asie Contemporaine)に寄贈された。こちらは、「マルセル・ジユグラリス史料コレクション」として段ボール箱15個分が既に資料分類を経た形で保管されている。資料整理専門の図書館司書が2か月間を費やして作業を行った結果だという。中国に関する新聞記事、原稿、写真、ネガ、レコード、フィルム、メモ類などの閲覧が可能である。ただし、今回の調査により、この中にはマルセルが執筆した日本に関する新聞記事のスクラップブックが紛れ込んでいることが判明した(写真

⑩)。しかし、これらの史料については、日本人による調査が未だなされていないため、日本ではその存在さえも知られていないのが研究の現状である。



写真⑩ CHAC資料はキーワード別



写真⑪ 日中国交正常化へ（1972年9月13日付フランス・ソワール一面トップ）

「無条件での友好」とあり、日本に対する戦争賠償請求放棄を謳った日中共同声明の内容を先取りした部分もある反面、「台湾との国交断絶なし」とも書かれ、事実と異なる点もある。（同月25日に田中角栄首相が訪中し、29日に日中共同声明が出されることになる）

太平洋戦争終結から復興に至る日本社会の実情がフランス人の目を通してどのように伝えられ、そのことにより、フランス人が戦後日本に対して

どのようなイメージを抱くに至ったのか。この点を明らかにしなければ、戦後日本の形成が国際報道とどのように関連していたのかという、ジャーナリズムをめぐる問題と役割の解明には至らないとする思いを強く抱くに至ったのである。このような問題意識を基に、時代の証言者の資料の分類と整理を行うことを通じて、未だ学界で十分に考究がなされていない、敗戦後から高度経済成長期に至る昭和20～50年代の日本社会、日本人とその文化について、フランスおよびフランス人の側から見るという新たな試みが成されない限り、問題の本質を解明することはできないと考える。



写真⑨ フランスと世界の高速道路（新聞の特集号）

さらに、マルセルの遺した資料の整理と分析という狭い次元に留まらず、当該資料の分析を通して、戦後の国際ジャーナリズムの枠組みの中で、フジヤマ、ゲイシャなど海外が求めるがままの東洋の異文化と、それと相反する猛烈なエコノミック・アニマルとしてしかイメージされていなかった日本と日本人のリアルな実情が、どのように具体的にフランスに伝えられていったのかという全体像を明らかにすることを目指し、日仏間の歩みの証となるデータを両国が共有することにより、日仏のジャーナリズム、および文化交流に関する研究基盤の基礎的な整備に資するという、より大きな目的に沿った取り組みの出発点・端緒になる

と考えるものである。以下、系統的な研究を積み重ねることにより、東アジア報道がどのように形成されていったかという問題を引き続き考察するものである。

(本論は平成26年度学園研究費助成金(A)の助成による成果の一部であることを付記する。)

注

- 1) 木下和寛『メディアは戦争にどうかかわってきたか』P.16、朝日新聞社、2005
- 2) 映画祭のエントリー作品の決定はディレクター(総責任者)によって行われる。この過程で世界中の映画関係者のネットワークを通じて出品作が選考される。日本初のパルムドール(Palme d'Or、最優秀グランプリ)受賞作品が1954年、第7回カンヌ国際映画祭の『地獄門』(1953年・衣笠貞之助監督)だったことから、マルセルが日本映画を推していたことが強くうかがえる。彼は1956年には「日本映画1896-1955 (Le cinéma japonais)」を出版した。アメリカ人映画評論家、ドナルド・リチー(Donald Richie)は1946年の来日以来、40年近く日本に在住し、日本映画を世界に紹介し、ジョセフ・L・アンダーソンとの共著で1959年、「ザ・ジャパニーズ・フィルム The Japanese Film: Art and Industry」を上梓した。これは英語による日本映画に関する初の系統的著述として海外における日本映画研究必読書とされるが、マルセルの著作は、その3年前に刊行された日本人以外による初の日本映画論である。
- 3) 日本貿易振興機構(ジェトロ)パリ事務所サイト、ジェトロフランス
<https://www.jetro.go.jp/france/missions/salons.html>
https://www.jetro.go.jp/ext_images/france/missions/pdf/150e_anniversaire.pdf
- 4) 原田香織『現代芸術としての能』P.200-204、世界思想社、2014「エレーヌの資料は、現在、フランスのCEEJA(アルザス欧州日本学研究所)に所蔵されている。……『羽衣』の楽譜やエレーヌの舞台写真、マルセルの手紙などが残っている。」

わきた・やすこ / 文化情報学部准教授
 E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp